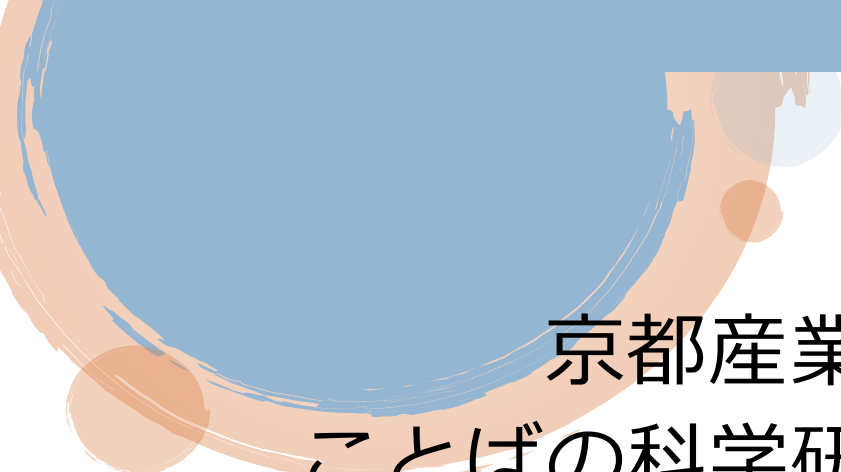




京都産業大学 ことばの科学研究センター 2024 年度第 5 回研究会

日時：2024 年 12 月 25 日（水）14:00～16:00

場所：4 号館 2 階 総合学術研究所

シモーヌ・ド・ボーヴォワール作品と演劇界

伊ヶ崎泰枝（外国語学部准教授）

フランスの作家・フェミニストであるボーヴォワールの作品において演劇界が果たす役割は看過できない。『招かれた女』をはじめとする小説においては、親交のあったパリ演劇界の人々に着想を得て多くの作中人物を創出した。エッセイ『第二の性』では、演劇に携わる女性の考察を通して自由、ナルシシズム、身体と老いといったテーマを論じた。さらに一連の回想録においても演劇人たちの活動に多くのページを割き、彼らの状況に対する選択と責任の問題を喚起している。本発表では、サルトルの小説作品との比較も交えながら、演劇界がボーヴォワール作品に織り込まれていく経緯を検証し、新たな解釈を試みる。

アントン・パーブロヴィッチ・チェーホフの全作品における動詞結合について ～チェーホフ没後 120 周年によせて～

北上光志（ことばの科学研究センター員・外国語学部教授）

「桜の園」「小犬を連れた貴婦人」など 300 を超える作品を世に出したロシアの文豪 A.P.チェーホフが亡くなって、今年で 120 年になる。これを記念してチェーホフの全作品で用いられている動詞結合（動詞と不定詞の結合）（総数 11822 例）を分析する。チェーホフ作品における動詞結合を「結合度、語彙、アスペクト、極性」の観点から考察し、言語学的意義を明らかにする。

